

- 1 水の秋旅の序でに橋渡る
- 2 煌々と詰所にぎはふ里祭
- 3 賽銭を虫の渦中に投げ込みぬ
- 4 一方は穴一方は鯨の穴
- 5 本名で黒子呼ばるる村芝居
- 6 爽やかや山と我が家と陸つづき
- 7 留石を固く縛れる秋思かな
- 8 墓参丁目番地のありにけり
- 9 ゆるやかに坂のはじまる桔梗かな
- 10 名月や俤にゆづる二寧坂
- 11 名月や飲んでから知る清酒の値
- 12 訪ひて勝手に南瓜叩きけり
- 13 喰ひながら零余子を人に包みけり
- 14 犬吼えてきては新入なる案山子
- 15 大安の紅葉を払ふ記帳かな
- 16 金貸に菊を返せる菊人形
- 17 実紫いつしか息の整へり
- 18 石段のどこかは濡れて紅葉狩
- 19 松手入問へば素直に答へけり
- 20 神無月湯呑みに茶葉の流れこみ
- 21 西口のどこか分からぬ神迎
- 22 水鳥の寝てゐる鳥についてゆく
- 23 竹馬を道間違へて降りにけり
- 24 冬紅葉僧は二列で入山す
- 25 振つてよささうな万両だけを振る

- 26 焼諸屋去年のこゑで売りにくる
- 27 味噌汁に海のもの入れ漱石忌
- 28 携帯が顫へまるごと炬燵鳴る
- 29 回転焼詰めたる箱のしつとりと
- 30 着ぶくれてゐて自治会の紛糾す
- 31 終ひ弘法地べたに高き皿並び
- 32 小道具のパンはほんもの聖夜劇
- 33 夜通しの静かな雨や宝船
- 34 同じこと訊きあつてゐる年賀状
- 35 終ひには紐いきいきと猿まはし
- 36 煙ごと串焼を買ふ初戎
- 37 まだ藪のごとき福笹授かれり
- 38 賑はひを抜けて賑はふ残り福
- 39 火おこしは祈りのかたち粥占ひ
- 40 吉報も凶報も食ふ小豆粥
- 41 食ひ終へて椀に湯気立つ小豆粥
- 42 初弘法店主と雨を案じあふ
- 43 懸想文売札束に札仕舞ふ
- 44 柴漬を見まはる嵐山の風
- 45 傘の雪木の葉の雪と払ひあふ
- 46 社長まだ法被着馴れず寒造
- 47 鳥を待つしづけさに似て寒造
- 48 冬の水映れば青の透きとほる
- 49 だんだんと赤の他人へ雪だるま
- 50 神の座の光を纏ひ追儼の矢

- 51 山の形褒めて紙漉師と別る―
- 52 花の兄や我が尻つけて生駒山―
- 53 白梅の影を持たざる軽さかな―
- 54 鶯の飛ぶまへ力抜いて鳴く―
- 55 日記には空のこと書く梅見かな―
- 56 菜の花忌唱へて名前覚えけり―
- 57 海苔船の海苔を払ひて舳ひけり―
- 58 武満忌澱み掬へば澄んでゐる―
- 59 庭園に水湧くところ落椿―
- 60 啓蟄のゲームカセット吹いて挿す―
- 61 苗札のたつぷりと水もらひけり―
- 62 おにぎりにいただき三つ春やすみ―
- 63 駘蕩や他人(ひと)の賽銭にて祈る―
- 64 はんぶんは辛夷のはうへ海の風―
- 65 春の日や吊りて仕舞へる一輪車―
- 66 山道のはじめ踏切蝶の昼―
- 67 雪解や最後の僧は門を閉ぢ―
- 68 古雛笛失くしても笛を吹く―
- 69 後ろよし前よし花菜よし発車―
- 70 花持たぬ草も葺きたる花御堂―
- 71 シャッターは前の店名燕の巢―
- 72 逃げ道を多く拵へ壬生狂言―
- 73 隣家(となり)とは違ふ町名朧の夜―
- 74 真ん中に要らない器械ある飼屋―
- 75 遠足や草で拭きたる靴の裏―

- 76 入口の横に窓描く巢箱かな  
77 川よりも広き河原や夏きぎす  
78 お茶の間のごとく筍直売所  
79 扇流し水の機嫌を訊ねつつ  
80 ハンカチは頬の固さにして仕舞ふ  
81 振花を見つけし列の振れをり  
82 草笛のだんだん下手になつてゆく  
83 月光にかはかしてゐる羽化の蟬  
84 入梅や厩の梁に曆掛け  
85 裏表さだまるまへの蠅叩  
86 全身を扇で指して確認す  
87 月下美人老いたるまへに仕舞ひけり  
88 人形が腹話術師の汗厭ふ  
89 かき氷親子の匙の入れ替はる  
90 臍の緒も浴衣も桐に仕舞ひけり  
91 坂に椅子はみだしてゐるピアガーデン  
92 舟虫を解散させてから帰る  
93 茅の輪にもくぐる人にも拌みけり  
94 鉾建や車輪の雨を手で拭ひ  
95 暮れやすき路地に鉾町ありにけり  
96 祇園祭厨に鉄のものおほし  
97 神輿仕舞ふ清めの水を拭きとりて  
98 川床のこゑ川のごとくに聞きながす  
99 御迎人形海に縁なき武士おほく  
100 船渡御や大阪の川皺くちやに